

「ほめ」のもつ否定的な機能： 会話の中で第三者を批判する際に使われるほめ言葉について

高宮 優実

要 旨

言語形式的には「ほめ」であっても、実際には批判や非難として機能している場合がある。このような機能は、これまでに、小説やエッセイなど作者によってつくられた文章にもとづいた資料の分析からは言及されているが、本研究において自然談話を分析した結果、日常の会話において、特に第三者を批判する場面で「ほめ」の形をとった皮肉や嫌味といった否定的な機能が使われていることが明らかになった。これは、直接言語的に批判をするよりも、状況をユーモラスに捉え、事態の深刻さを回避する役割があるためと考えられる。

キーワード：ほめ、皮肉、嫌味、批判、自然談話

1. はじめに

2014年7月11日の『朝日新聞』で、次のような記事が紹介されている（一部抜粋）。

「坊ちゃん、ピアノ上手にならったなあ」。近所のおばさんからそう言われたら、どう応じるか。普通は、「いや、そんなことないです」。だが、京都の人は違う。「やっぱり聞こえていたんでしょう。ご迷惑をおかけしまして」

苦情を言うにも京都のひとは直接は伝えない。音や振動という近所のトラブルでも、その家の大工さんが隣の大工さんに伝えて解決するという。当人同士は通りで出会っても「暑おすなあ」「よう降りますなあ」と、あいさつだけしてやり過ごす。

大峯伸之 「京町家の異邦人 [一を聞いて十を知る文化]」より

この記事では、子どものピアノが一見ほめられているようで、実際は非難されていることを聞き手は理解したため、謝罪したということになる。もしもこの場面で、本当に子どもが賛辞を受けていると誤解し、謙遜したのでは、的外れな返答となったことになる。このようなことは、京都に限って起きている現象ではない。日本語を第二言語・外国語として学んでいる学習者向けの教材でも、似たような状況が取り上げられている。土岐・村田（1989）の『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 12 発音・聴解』では、隣の主婦が回覧板を持ってきたときの会話例で、「苦情」が扱われている。「お宅のお嬢さんですか、ピアノ、お上手ですね。いつお始めになったんですか。毎晩遅くまで熱心に、将来はピアニストを目指すといいですわ。」とほめられ、聞き手は最初は「いえ、そんな」と謙遜するものの、「いつも主人と感心していますの。お上手ねって。」とさらに「ほめ」が続くため、次第に心配になり、「そんなに聞こえますか」と、音が迷惑になっているのではないかと尋ねると、それには相手は反応せず、さらに「ええ、楽しませていただいていますのよ」と「ほめ」を続ける。その後、聞き手は家に入り、娘に対し、「お隣の人がね、ピアノうるさいって。夜弾くの、やめなさいよ。」と注意する。ここでの例について、坂本・ウェインブルグ（2017）は、苦情を和らげるために「ほめ」の形を使ったものであり、このような例は日本語非母語話者には誤って受け取られる恐れがあるとしている。秋元・宮澤・杉浦・川島（2011）は、ほめの形をとった皮肉に対する返答の仕方を調べたところ、「謝る」「苦笑する」というのが主な返答の仕方となっていた。しかし、その「ほめ」が皮肉だと正確に解釈できなかった場合には、適切な形での返答は難しくなる。

「ほめ」は、従来、他者に認められたいという相手のポジティブ・フェイスを満たすための発話行為であり（Brown & Levinson 1987）、相手との良好な人間関係を築く上で重要な役割を果たす。しかし、上記の2例のように、従来の肯定的な意味をはずれ、相手に対して皮肉、嫌味を表現するという否定的な機能もある（古川 2010）。従来の「ほめ」の持つ否定的な機能については、小説など書かれた文章による資料の分析が中心となっている。本稿で

は、日常生活における話し言葉を分析の対象とし、自然談話における「ほめ」の否定的な機能の使用実態を明らかにする。

2. 先行研究

これまでに、皮肉の形をとった批判については様々な研究が行われている。Dews & Winner (1995) や、Dews, Kaplan & Winner (1995) は、直接的に批判をするよりも、皮肉の形をとった批判のほうが、非難の度合いが和らげられるとしている。Roberts & Kreuz (1994) は、皮肉を含む間接的な表現を使う目的として、状況をユーモラスに描いたり、話者の立場を守ったり、肯定的な感想を伝えたりすることを挙げている。Brown & Levison (1987) では、皮肉は相手の面子を脅かす度合いを下げ、話者同士の協調しあう度合いを高める効果があるとしている。これらの意見に対し、Colston (1997) は、逆に、状況によっては皮肉は非難の度合いを強めるために用いられるとしている。

一方、通常、「ほめ」は相手に関する何らかの対象について肯定的評価を行うために用いられるとされている (Wolfson 1984, Holmes 1988, 小玉 1996, 熊取谷 1989, 古川 2010)。Wolfson (1984) は、「ほめ」は社会的潤滑油として働き、Holmes (1988) は、話者と聞き手の連帯感を強めるとし、熊取谷 (1989) は、肯定的な評価を伴う支援行為であるとしている。ほめるという言語行動を、Brown & Levinson (1987) は、他者から認められたいという相手のポジティブ・フェイスを満たす、ポジティブ・ボライトネスのストラテジーとして位置づけている。また、橋本 (2001) も、潤滑な社会関係・友好関係の維持がコミュニケーションの目的であるならば、「ほめ」によって、相手への評価や理解を示すことは重要であるとしている。

「ほめ」について、日本語と外国語を比較分析した研究も、多く行われている。例えば、日本と韓国 (金 2007)、日本とアメリカ (小玉 1993a, 横田 1986)、日本と中国 (王 2017, 永田 2016, 袁 2012)、日本とロシア (ウエインベルグ 2016) を比較したものなどである。このうち、金 (2007) は、日本語では話し手がほめる側でもほめられる側でも、相互に聞き手のフェイス

を優先し、韓国語ではほめ手も受け手も両者ともに話し手である自分のフェイスを優先する傾向があることを明らかにし、王（2017）や袁（2012）は、中国人日本語学習者の「ほめ」は、日本語母語話者からマイナス評価をされたり誤解される傾向があることを指摘している。このように、母語によって、文化規範や言語の使用規範が異なるため、学習者の「ほめ」の使用方法にもある一定の傾向が見られるのは確かである。

一方、「ほめ」には、「夜遅くまでピアノの練習でご熱心なこと」というように、形式的には「ほめ」であっても実際には皮肉や苦情として機能する可能性があることが言われている（古川 2010）。小玉（1993b）は、勉強しないでマンガばかり読んでいる子どもに対して「まあ、なんて勉強熱心なの」というような皮肉として「ほめ」の形態が用いられる場合などには、「ほめ」という行為は成立しないと述べている。こういった日本的な苦情の言い方は、外国人には理解が難しいことも指摘されている（大滝 1996）。一方、Colston（1997）は、相手に対する直接的な批判の例として、バスケットボールのフリースローを失敗して試合に負けてしまった場面で、その選手に向かって「ナイスシュート」と言うことは、「ひどいシュートだった」と言うのに比べて責める度合いが軽くなるのかどうかを議論している。つまり、このような皮肉の形をとった批判というのは、日本語だけに限って起きる現象ではない。古川（2010）は、「ほめ」が本来の、相手の地位を向上させる機能とは逆の皮肉や嫌味に解釈される場合について、「ほめ」は相手に「ほめ」として受け取られ、成立するものの、ほめられた側がその意図を「苦情」と解釈するために、相手の地位を結果として下落させる働きがあると説明している。さらに、「相手に対する態度」を肯定的か否定的かに分け、相手に対する態度が否定的だが、表現としては肯定的なものを使用すると、それが皮肉として伝わるとしている。一方、日本語母語話者が何を「ほめ」と認識するかについて研究した坂本・ウェインブルグ（2017）は、肯定的に評価しているものを「実質ほめ」、お世辞、愛想、おだてなどを「形式ほめ」、これらどちらとも認識されない、外形的には「ほめ」と見られるものの受け取った側が「ほめ」とは認識しないケースとして、「和らげた苦情、ほめ殺し」

「皮肉、嫌味」「侮り、揶揄、からかい」「セクハラ」などを挙げ、これらは「ほめの周辺」として位置するとしている。

これまでの研究では、書かれた資料の分析により結果が得られているが、実際の話し言葉ではどのように機能しているのかを明らかにすることにする。これにより、他者を批判する際に、なぜ「ほめ」が使われるのかを考察し、ほめられる相手のいない状況で、話し手同士がほめことばによって第三者を批判をしながら関係性を構築していく仕組みについて論じる。

3. 研究目的と方法

3.1 肯定的な「ほめ」の定義

小玉 (1993b : 24) は、Holmes (1988) の定義をもとに、「ほめ」について以下のように定義している。

「ほめ」とは、話し手が話し手以外の人の持っている、話し手と聞き手の双方が価値を認めるなにか（例えば、持ち物、性格、技術など）を自発的に見つけ出し、それに対して明示的あるいは暗示的に「良い」と認める行為であり、結果的には人間関係の潤滑油として機能すべきものである。

3.2 否定的な「ほめ」の定義

本稿では、3.1で挙げられるような肯定的な、通常の「ほめ」とは異なり、皮肉、嫌味、苦情等、否定的な内容を表すものを、否定的な「ほめ」と定義する。古川 (2010) は、「ほめ」の対象や条件の不一致、対人関係によって、「ほめ」表現が皮肉や嫌味、ひいては苦情として機能するのではないかという仮説をたてているが、この仮説をもとに、自然談話において「ほめ」の否定的な機能がどのように現れているかを検証する。ただし、自然談話では直接相手に「ほめ」の形をとった皮肉や批判を言う傾向が少ないため、本稿では、特に自然談話に現れやすい、第三者に対する否定的な「ほめ」を分析の対象とする。

3.3 研究の課題

本稿の具体的な研究の課題は以下のとおりである。

自然談話において、その場にいない第三者を批判する意図で、相手と協調して故意に皮肉や嫌味を表す「ほめ」が使用されることがあるかどうかを確かめ、そのストラテジーとしての効果や使われている理由、背景を分析する。

3.4 研究方法

『談話資料 日常生活のことば』(2016)と、『名大会話コーパス』に収録されている会話データを分析の対象とした。本稿の会話1-5は、『談話資料 日常生活のことば』からの抽出であり、会話6、7は『名大会話コーパス』による。『談話資料 日常生活のことば』には、10代から90代までの広い年代層の男女が日常生活の雑談を中心として行った自然談話が収録されている。『名大会話コーパス』は、10代から90代までの男女の日本語母語話者同士の雑談が収録されている。これら2種類のデータの中で、3.2で定義した否定的な「ほめ」の現れる場面を抽出し、どのような状況下で発話されたかの詳細と、使用されたストラテジーを、会話分析の手法を用いて検証した。

4. 結果と考察

次の会話1の例は30代の男性である上司が、車中で、同じ30代の男性部下と雑談をしている場面である。部下が、自分の同僚について、ほかの人の話を全然聞いていないのにも関わらず、相手に話をあわせるのが非常にうまいと皮肉を述べている場面である。

【会話1】

- 1 部下：この人は、面白いですよ、○○ちゃん。全然、ほんと、話聞いてないですよ。
- 2 上司：ハハハハッ (笑い)。そうなの？

→3 部下：ぜんっぜん聞いてないです。お客さんとの話も全然聞いてないです。だけど、合わせるのは、ほんと、うまい。天才的にうまいですねえ。

4 上司：ああ。完全にその人の身になって聞いている感じがするけどね。

5 部下：しますよねえ。でも、全然聞いてないんです。

6 上司：ハッハッハハハ (笑い)。

→7 部下：まあ、みごとに。で、さも知ってるように話しちゃうけど、全然知らないんです。

8 上司：へえー。

<中略>

9 部下：旅行とかもそうですねえ？

10 上司：ああー。

11 部下：あそこの一景色がよくてとか言ったら、「ああ、そうなんですよね」みたいなこと言ってるけど、いや、絶対行ったことないんです、ないんでー。

12 上司：へえー。<ハッハハハ (笑い)>へえーーー。

→13 部下：うまいですよ。

14 上司：そうなんだ。

15 部下：疑ってみると分かるんですよ。

16 上司：ああー<ハッハハハハ (笑い)>。

17 部下：疑わないと分かんないです。

ここでは、部下が、他人の話を全く聞かない同僚の噂話をする際に、「うまい」「みごと」「天才的」などのほめことばを並べ立てて皮肉を言い、それにより上司の笑いを誘うことに成功している。このように、他者に対して否定的なコメントをする際に、形の上ではほめることで、それが嫌味として聞き手に伝わり、その面白さやおかしさが際立っているということが言える。相手に直接苦情を言う際に、あえて「ほめ」の形式を用いる、もしくは、苦情の前後で「ほめ」を入れる方略があることは坂本・ウェインベルグ

(2017) によって明らかになっているが、それは、他者を批判する際に「ほめ」を使用することによって、それが深刻な悪口・批判とならず、冗談として受け取られ、面白さが際立つためではないかと考えられる。そのため、世間話としての他人のゴシップには、「ほめ」の形をとった悪口が見られるのであろう。

会話2は、居酒屋で、40代の男性店主と親しい男性客が、食事しながら雑談している。店主が、店主の認知症の親についてからかっている場面で「ほめ」の表現が現れる。団子を30分前に出したばかりなのに、食べてないと不満を言われることに対して、「みごとだ」と「ほめ」を使って形容している。

【会話2】

- 1 店主：「団子食べるー？」なんて団子渡して出してやったらさ、30分したら、「さっき食べたじゃない」「食べてないよ、ワー」。
- 2 客：ハハハハ（笑い）。
- 3 店主：もうほんとに【笑いながら】{<笑い> [客]}、忘れちゃうんだよねえ【笑いながら】{<ヘッ（笑い）> [客]}。
- 4 店主：もうー、みごとなもんだよ。
- 5 客：よしっ、よしっ。
- 6 店主：都合がいいんだか、何だか。
- 7 客：ハハハ（笑い）。

この会話では、店主が親に団子を渡したところ、30分後にまた親が食べたがると説明している。店主が「さっき食べたじゃない」と文句を言うと、親は「食べてない」と大騒ぎして反論するというのを「ワー」と形容している。これによって、笑いが共起され、客とともに店主も笑っている。さらに笑いながら、「忘れちゃうんだよねえ」と3行目で文句を述べ、その忘れる様子を、4行目で「みごと」だと形容している。30分前に食べたばかりなのに、認知症のために綺麗さっぱり忘れてしまい、再び団子をほしがるといふ様子は、非常にづらい状況なのだが、あえて悲観的な言葉は避けて、滑稽

に表現するために、ほめ言葉である「みごと」を、大変だ、ひどいという意味合いで使っていると考えられる。

次の会話3は、50代の女性客が、印刷屋の店先で、30代女性の店員と雑談をしている場面である。店員のほうが客よりも20歳以上年下だが、親しい関係にある。二人は銀行の対応について話をしているが、普段は対応の遅い銀行が、税理士と一緒に連れて行くと全く対応が変わるという、相手によって接客態度を変える様子について批判している。

【会話3】

- 1 客 : うん、だから銀行に、その一、うん、だから、銀行に、その一、いろんなね、あの、下ろしに行くのなんかも、全部ね、その後ね、その税理士さん、ついてきてくれる、まだ若い人だったけどね、あの一、ついてきてくれたのね。
- 2 店員 : うーん、それも何かおもしろくない。
- 3 客 : ねえ、もうねえ、何かねえ、やっぱりねえ、あっちもね、銀行もね、「あ、税理士さん連れてきた、あ、何とかだ、うまくやらなくっちゃ」、みたいなね、感じで、もうね、すごいスムーズ。
- 4 店員 : それだったらね。
- 5 客 : もうね、絶対、あたし、だからね、[銀行名1] だっけ、何だっけ、そこにあるのね。
- 6 店員 : ここ、[銀行名1]。
- 7 客 : うん、絶対、もうね、何があっても、絶対にもうね、あの、あれ、タッチしない<笑い>。
- 8 客 : もう絶対うちではね、あの一、一生使わないって決めたの、みんなで。
- 9 店員 : あ、そうなんですかー。
- 10 客 : うん、もうね、あ、あんな嫌、あんな嫌な、嫌な思いしてね、やることないって。

この会話では、自分だけで銀行に行った場合には時間がかかる対応が、税理士を連れて行くことで、非常にスムーズになると、その効果をほめことばで述べているものの、それが税理士が同席していない状況との対比となって、ネガティブな感情を引き起こし、その銀行はもう使いたくないと批判している。

次の会話4は、大学で50代の女性教員がゼミの20代の女子学生と就職活動について雑談をしている場面である。よく知っている教員・学生であり、親しい間柄のため冗談も言い合える関係にある。その場にいないほかの教員に添削してもらったエントリーシート書類が数多く通ったことを報告し、それについて添削の効果だとほめながらも、その書類の出来をよくなかったとするキャリアセンターの人の話も出し、冗談を言い合っている。

【会話4】

- 1 学生：エントリーシート、結構通ったんですよ。
- 2 教員：うん、だから、あたしもあれを聞いたときに、80出して、70面接に行ったってのは、ね、書類が通ったってことだから、すごいねって思ったの。
- 3 学生：通りました。
- 4 教員：ふうん。
- 5 学生：先生のおかげで【笑いながら】。
- 6 教員：ええ、何で？【笑いながら】。
- 7 教員：あ、添削？【笑いながら】。
- 8 学生：添削してもらったって【笑いながら】。
- 9 教員：ハッハッハ、ハッハッハッハッ。
- 10 学生：でも、キャリアセンターの方とかに、見せるとー、「え、これが通ったの」ってよく言われます【笑いながら】。
- 11 教員：ハハハハッ。

この会話では、就職活動の一次試験がうまくいったことを報告した学生

が、5行目で、「(添削してくれた第三者である)先生のおかげで(通りました)」と、感謝のことばを述べ、8行目で添削を受けたおかげで合格したのだと他者の力、援助のおかげだとほめている。しかし、その後10行目で、キャリアセンターの人に添削してもらったエントリーシートを見せると、「これが通ったの」と評価されないことを述べ、間接的に、その教員の添削の仕方はよくなかったと批判をしている。つまり、形の上では教員をほめているが、実際には、それは特に一次試験の結果がよかった要因ではない、または、添削以外の自分の能力、要因によるものだと、自分自身をほめていることになる。

次の会話5は、アメリカ在住の30代の男性同士が職場で同僚と雑談をしている場面である。

【会話5】

- 1 男性1：「お見合いした人どうしてんの、続いてんの」とか言ったら、
「いやあ結婚の意欲がなくなってー」とか言って。
- 2 男性1：「あれから会ってないんだ」とか言って【笑いながら】。
- 3 男性1：「お前なあ」って感じで【笑いながら】。
- 4 男性2：もう、あ、いや、楽しみすぎですよ、それは。

<中略>

- 5 男性1：じゃあ、その、何、結婚意欲がなくなったってのがすべてを
物語ってるのね。
- 6 男性2：そうですよー。
- 7 男性2：もう分かっちゃいました。
- 8 男性1：分かっちゃった【笑いながら】。
- 9 男性1：何だ？
- 10 男性1：ああーあ、そうか、心配してやったのに<笑い>。
- 11 男性2：すごい、その、元気ですね【笑いを含んだ声で】。
- 12 男性1：あ、そうなんだ【笑いながら】。

この会話では、元同僚の男性が、アメリカにいた頃は、生活があわずに落ち込んで元気がなく、お見合いでもして結婚しようかという状況だったのに、就職が決まって日本に帰国すると、アフターファイブが忙しくなり、結婚の意欲もなくなるくらい楽しく過ごしているというのを聞いて、元気な様子だというのを皮肉をこめて話している。結婚意欲がなくなるくらいにプライベートを楽しく過ごしているというのを、アメリカにいたときの元気がなかった頃の状況と比較して、冗談として「元気だ」と描写しているのである。3行目の「お前なあ」というのも、その状況を戒める非難をこめた言い方であり、男性1も2もお互いに笑っていることから、冗談でほめていることがわかる。

次の会話6は、20代と30代の女性の大学院の同級生同士が、院生室で雑談をしている場面である。ファミリーレストランの駐車場で、2歳半から3歳程度の男児が一人でうろうろしていて近くに親はいないのかと心配しながら見守っていた学生1が、その後、その子どもが他の多くの車のドアを開け閉めする動作を繰り返すようになったため、「お母さんは」と聞くと、「いない」と言い、「お母さん、レストランの中にいるの」と聞いたところ、「いない」、「一人で来たの」と聞くと「うん」と答えたため、ファミリーレストランの店員に預けてきたという話をし、そのときのことを回想している場面である。

【会話6】

- 1 学生1：すごいかわいい顔した男の子だったんだけどさー。
- 2 学生2：うーん、なぞだ。
- 3 学生1：ねー、しゃ、なんかね、ちゃんとしゃべれるのにね、なんか聞くと、(うん) あーとか言っでごまかすのよ。
- 4 学生2：や、うまい、賢いんじゃないんですか、それ、(<笑い>)もしかして。
- 5 学生1：まだあんまり、小さいからしゃべれないのかなと思ってたらさ、(うん) 別のこと聞くとさ、(うん) 結構しゃべるの。
- 6 学生1：でも、お母さんはとか言うと、***。

→7 学生2：いや、それはかなりの。〈笑い〉

駐車場で一人で他人の車のドアを次々に開けながらさまよっている子どもが、他のことを聞くとかなり正確に話ができるのに、母親はどこにいるのかと聞くと、話せないふりをしてごまかすということについて、聞き手の学生2は「うまい」「賢い」と賞賛している。その後笑っていることから、これが皮肉であることがわかる。その後、「それはかなりの」と表現しているのも、かなり「大人を欺くのがうまい」という意味で、ほめている。その後二人がこの子どもについて同時に笑っていることから、一人でさまよっている子どもについて、まわりの大人は心配するものの、本人はその状況を楽しんでいるという対比を、面白い話として扱っているのだと考えられる。

次に会話7は、2名の30代の女性の元同じ会社の同僚同士が、ホテルの喫茶コーナーで雑談をしている場面である。女性1は自分の母親が冷たいということ述べているが、女性2は、優しくたと反論している。それに対して、女性1がその優しさは演技であり、見せかけの嘘が「うまい」のだと、ほめことばを使って非難している。

【会話7】

- 1 女性1：あの人は違うもん。
- 2 女性1：養母だもん。
- 3 女性1：じゃなきゃ、あんなに私に冷たくするわけないじゃん。
- 4 女性2：さっきやさしかったよー。
- 5 女性1：そんな。
- 6 女性2：わざわざ外まで出てきてくれて、ごめんね。
- 7 女性2：もうすぐ帰ってくるからねー。
- 8 女性1：あんなの見せかけだもん。
- 9 女性1：うちの一族俳優と女優で固めてあるもん。
- 10 女性2：そうなんだー。
- 11 女性1：うーん。

- 12 女性1：そんなんうそに決まってるやーん。
→13 女性1：みんな、昨日もまたねー、うまいけど。
14 女性2：大丈夫、大丈夫。
15 女性1：何が。

女性1は自分の母親が冷たいということを女性2に説明するに当たり、本当の親であるにも関わらず、2行目で「養母だもん」と虚偽の情報を述べる。女性2が4行目で「さっきやさしかった」と、6-7行目では、「わざわざ外まで出てきてくれて（女性1が不在で）ごめんね、もうすぐ帰ってくるからね」と声をかけてくれたと述べたことについても、8行目でその優しさは「見せかけ」と述べ、さらに、9行目で「うちの一族俳優と女優で固めてあるもん」と述べている。これもすべて虚偽であり、一族に本当に俳優や女優が揃っているわけではなく、演技で優しいふりをしているだけだという内容を誇張するための偽りであると言える。そのような話はすべて嘘であり、13行目で、「うまい」と述べている。それに対し、14行目で、「大丈夫、大丈夫」と、女性2が反論している。たとえ嘘の演技だったとしても優しいことには変わりはないということで、女性1はそのような母親を持って恵まれているという意味で「大丈夫」だと言っているのだろう。それに対し、女性1は15行目で「何が（大丈夫なのか）」と反論している。ここでは、女性1と女性2が協働して女性1の母親の悪口を言うのではなく、あくまで、悪口を言いたいのは女性1だけである。そのため、皮肉が女性2との間に共有されず、それ以上の「ほめ」の形をとった皮肉は、出てきていない。ここでは明らかな嘘を言うことで、状況を面白く相手に伝えようとしていることが背景としてあると考えられる。

5. おわりに

本稿での分析の結果、自然談話で他者について批判する場面において、「ほめ」の形をとった皮肉や嫌味といった否定的な機能が現れることが明らかになった。この形式を用いると、直接的に他者を非難するよりも、おか

しさ、ユーモアなどが生まれるため、相手からの共感を得やすくなるという効果があるのではないかと考える。「ほめ」は後に続く反論や批判を和らげるために緩衝材として用いられることがあるが (Wolfson 1984、熊取谷 1989)、今回の分析では、「ほめ」の形をとった批判というのは、面白さ、おかしさのニュアンスを付け加えることができるため、後に笑いを伴いやすく、直接的に批判をするよりも、相手と協調しながらコミュニケーションをする戦略として働くのではないかと考えられる。さらに、あからさまに他人に対する批判や悪口を言うネガティブな人物だという印象を相手に持たれないようにしたいという自己弁護の意識も働いていると考えられる。冒頭で述べたように、このような「形式」と真意が異なる言語行為は、日本語非母語話者には理解しづらいものである。また、皮肉は、特に子どもたちには誤解して受け取られる傾向にある (Demorest, Silberstein, Gardener & Winner 1983, Winner 1988)。本研究では、会話の中で第三者について噂話の形でほめ言葉が使われているケースに限って分析したが、相手を直接批判する「ほめ」とは、その使われる意図、背景が異なる可能性もある。自然談話のデータではなかなか現れることがないため、困難ではあるものの、今後の研究では、会話の中で、相手を直接批判する「ほめ」の形をとった批判の例を探し、第三者に対する否定的な「ほめ」と比較した上で、その両者にどのような違いがあるのか、さらに分析を進めていきたい。

参考文献

- 秋元頼孝・宮澤志保・杉浦元亮・川島隆太 (2011) 「皮肉や肯定的発話への返答のしかたと性格特性との関係」『電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎』110(383) pp. 25-30 一般社団法人電子情報通信学会
- ウェインベルグ ナジェージダ (2016) 「日本のビジネス場面のほめ言葉一日露ビジネス関係者の視点から」『日本語・日本学研究』6 pp. 163-182 東京外国語大学国際日本研究センター
- 袁帥 (2012) 「日中接触場面における「ほめ」—中国人日本語学習者の「ほめ」の言

- 語行動と言語問題を中心に―」村岡英裕編『千葉大学人文社会科学研究所
研究プロジェクト報告書248 外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言
語管理研究』10 pp. 107-122 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編 (2016)『談話資料 日常生活の
ことば』ひつじ書房
- 王欣 (2017)「中国語と日本語の「ほめ」の返答に関する対照研究」『地球社会統合科
学研究』7 pp. 1-20 九州大学大学院地球社会統合科学府
- 大滝敏夫 (1996)「ほめことばの日独比較」『日本語学』15-5 pp. 43-49 明治書院
- 大峯伸之 (2014)「大峯伸之のまちダネ 京町家の異邦人72」『朝日新聞』2014年7月
11日付夕刊 朝日新聞大阪本社
- 金庚芬 (2007)「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』10-1 pp. 18-32
社会言語科学会
- 熊取谷哲夫 (1989)「日本語におけるほめの表現形式と談話構造」『異文化適応の理論
的実践的研究』2 pp. 97-108 広島大学教育学部日本語教育学科
- 小玉安恵 (1993a)「Conversation opener としてのほめ言葉：日米の文化的背景をめぐ
って (第五回日本言語文化学会発表要旨)」『言語文化と日本語教育』5 pp. 46-51 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 小玉安恵 (1993b)「ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観：外見のトピックを中心
に」『言語文化と日本語教育』6 pp. 22-35 お茶の水女子大学日本言語
文化学会
- 小玉安恵 (1996)「対談インタビューにおけるほめの機能 (1)」『日本語学』15-5 pp.
59-67 明治書院
- 坂本恵・ナジェージダ ウェインベルグ (2017)「ほめの諸相―日本語母語話者は何を
ほめと認識するか―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』
43 pp. 121-136 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 土岐哲・村田水恵 (1989)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 12 発音・
聴解』荒竹出版
- 永田良太 (2016)「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」―中
国語を母語とする上級日本語学習者を対象として―」『語文と教育』30

- pp. 139-150 鳴門教育大学国語教育学会
- 橋本良明 (2001) 「配慮と効率—ポライトネス理論とグライスの接点」『言語』30-12
pp. 44-51 大修館書店
- 古川由里子 (2010) 「「ほめ」が皮肉や嫌みになる場合」『日本語・日本文化』36 pp.
45-57 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 横田淳子 (1986) 「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日
本語教育』58 pp. 203-223 日本語教育学会
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge,
England: Cambridge University Press.
- Colston, H.L. (1997) Salting a wound or sugaring a pill: The pragmatic functions of ironic
criticism. *Discourse Processes*, 23, pp. 25-45.
- Dews, S., Kaplan, J., & E. Winner (1995) Why not say it directly? The social functions of
irony. *Discourse Processes*, 19, pp. 347-367.
- Demorest, A., Silberstein, L., Gardner, H., & E. Winner (1983) Telling it as it isn't: Children's
understanding of figurative language. *British Journal of Developmental Psychology*,
1, 121-134.
- Dews, S., & E. Winner (1995) Muting the meaning: A social function of irony. *Metaphor and
Symbolic Activity*, 10, pp. 3-19.
- Holmes, J (1988) Playing compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of
Pragmatics*, 12, pp. 445-465.
- Roberts, R.M. & R.J. Kreuz (1994) Why do people use figurative language? *Psychological
Science*, 5, pp. 159-163.
- Winner, E. (1988) *The point of words: Children's understanding of metaphor and irony*.
Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wolfson, N (1984) Pretty is as pretty does: A speech act view of sex roles, *Applied Linguistics*,
5(3), pp. 236-244.

(たかみや ゆみ：アラバマ大学パーミングハム校)

(2018.11.15 受理)